日本における最近の革命

　ショーグンの政府が倒れ、ミカドが最高権力に復権し、二元統治体系および封建制が廃止された。その直接的原因として、日本の国土における外国人の存在がある、という印象が欧米人一般に持たれている。だが、ダイ・ニッポンに住み、現地の人々の思想潮流に親しみ、この国の歴史を学んだ人々の間では、まったく共有されない見解だ。外国人および彼らの意図したことは、政治の二重構造が破壊されるにあたっての機会にはなったが、原因ではなかった。原因はすでに、彼らが来る以前からずっと作動していて、この結果をもたらしたのだ。外国人の存在は、避けられなかったものをただ、早めただけなのだ。

　本章では、最近の日本における驚異的な変化の真因をお見せするつもりだ。そこには三段重ねの政治的革命があり、国の対外政策の深甚な変更があり、社会改革の開幕があった。その改革が我らに、日本がアジア的なるものを峻拒し、欧州的すなわち文明の理想をこそ採用するように、と望ませたのだ。そして私は、これらが主に内側からの、すなわち外側からではなく、衝撃によってではなく、衝動によってひき起こされたことを、また概ね理知の力によって起こったことを、証明したいと思う。

　日本の歴史には、ペリー提督が現れて以降の出来事の流れに明瞭だが、それぞれ別個の運動がたくさんあって、互いに必然的に結びついているものもあり、それぞれはっきり別々なものもあって、それらが歴史の流れの源となっている。以下、実現を企図されたこととして　1. ショーグンを一封臣としてあるべき地位に引きずり下ろす　2. 真の皇帝を最高権力に復帰させる　3. 封建制度の廃止と、古代帝政への回帰　4. 仏教の廃止、および純粋神道を国民的信仰として、また政府の装置として確立する　・・この四つの運動は歴史的また必然的につながっていた。五番目に、外“夷”を退去させ、日本を他国から超然的に孤立させること。六番目、そんな考えを棄てること。西洋文明を採用し、国際礼譲の場に参入すること　第一と第二の運動の起源は、今からさかのぼること一世紀半前の時代にあると言わねばならない。第三と第四については前世紀にあり、第五と第六は概ね今を生きる若者の記憶の内に彼が奮い立った月日がある。

　ペリー出現のはるか前、ある概念が成就されるべき目的として明確に抱かれた。その熱烈な思索者たちにとって、二元制の下で生きる日々は、山上の万年雪にも似た永遠の不満の冬だった。やがて季節はめぐり、その春は来て、洪水となった。江戸湾におけるペリーは、時ならぬ雪融けをもたらす、二月の熱い南風のようなものであったろうか。融けた水は集まり、将軍体制と封建制を砂上の家並みのごとく押し流した。それらは大いなる実りの秋を待つには、すでに腐敗と虫食いが進み過ぎていた。ミカドの箱舟は権力の座に漂着した。仏教は岩の上にあり、損傷は受けたが、堅固だった。外国人には船を係留できる杭を打った足場としての条約があり、立場はかつてよりはましになった。新たな流れを合せて極大化した水の進路は、新たな水路へとそれた。結果の重力に逆ら

い決してたどり着けない永遠の過去へと続く坂を駆け上がることをやめて、洪水は国民という川に鎮まった。その川は人類の連帯という大海につづいている。

これらの運動は主に、理知的な力が駆動力となっていた。鹿児島や下関に放たれた外国の砲弾の衝撃だとか、日本人に対して求められた重く不法な賠償だとか、そんな自己満足の外国人が信じているようなものが過去十年の出来事をもたらしたのではない。日本在住のあるイギリス人作家が「家康の遺産」について語る中で、こんな結論を書いている。「過去全体において、この国を統治してきた国柄、それは高次の文明の逆らい難いモーメンタムには道を譲るということである」。彼は明らかに、二元政治や封建制の崩壊を、欧米の高次の文明との接触による直接的結果だとみなしている。日本について書いているイギリス人たちは、鹿児島砲撃こそ日本人を外国文明の採用に駆り立てた最大要因だとでも言いたいようだ。

また、日本の封建制廃止が称賛される時、それは「ペンの一撃」により、「ヨーロッパが過去数世紀をかけて成し遂げたことが、一日にして成された」と、大いに言われ書かれてきた。ダイ・ニッポンについての知識を、古い著作や事典、また現地を知らない出版業界に頼るほかない外部の人間は、アメリカの新聞が日本人はみなプリンスであるごとく書いた時には、国作りにはげむ半神たちを眩惑的に想像してしまうかもしれない。封建制が廃止される前、最中、後をずっとダイミョー（以下、大名）の首都で暮らしていた筆者には、ここで一つ比較することで答えを得られる問いがある。アイルランドの新兵が、敵兵の首の代わりに脚を切り落とす理由だ。日本の封建制は、それが廃されるずっと前からその墓が準備されていた。将軍が倒れて、首のない胴体が残った。脚を切って埋めるのは造作もなかった。実際それが、ミカドの政府がしたことなのだ。

先の我らの内戦について理解しようとする時、サムターの開戦から、あるいは 1851 年の妥協から考察したところで、無駄だろう。今日の日本を理解しようとする時、ペリー以後の出来事のみを見るならば、同様の誤解に到るのだ。1868 年の大いなる成育、その根は過去の数世紀に伸びている。

頼朝の行動は実際、平家が始めた簒奪劇という長い舞台の山場だった。軍事的必要を口実として、彼は大簒奪者となった。1184－1199、この期間が、以後世界の政治的謎となった二重構造政府のはじまりだった。ケンペルも、出島のオランダ人たちも、ポルトガルのイエズス会士たちでさえも完全な理解には達しなかったようだ。我々の事典や教科書は、彼らのナンセンスな誤解に満ちている。曰く“二人の皇帝”、一人は“霊的”、もう一人は“世俗の”。そして明敏なるペリーとその後継者たちは下役にすぎない者と条約を結ぶ破目になり、今となっては、預言あり、フィクションあり、哀歌ありの面白読み物と成り果てた文書がどっさり、日本の外交書簡として生み出された。このナンセンスは健在であり、日本のリップ・ヴァン・ウィンクルたちの日英両語の会話の中で、“タイクンの復権”などと古錆びた言葉の誤用が今も聞かれる。日本に皇帝は一人しかいない。ショーグンは軍事的簒奪者であり、タイクン（以下、大君）という称号は正に

大言壮語、外交的欺瞞でしかない。

これまで、頼朝の政策が北條、足利、徳川諸氏によっていかに継承されたかを見てきた。徳川は玉座と幕営の恒久的分離を完成した。将軍が京都へ行きミカドを表敬する慣例も、家光の後は廃絶した。江戸の最高司令官の鉄の手による支配が、帝国のどこにいても知覚された。戦乱の数世紀が続いた後の、完璧な平和だった。学問が花開き、芸術が栄えた。バクフ（以下、幕府）政治の機構は完璧で、ミカドの権力など影法師としかみえなかった。もっとも外国人が想像していたよりは、ずっと大きなものではあったが。

江戸と京都、ふたりの支配者の住まいのありようは、横柄な将軍と威圧された皇帝というそれぞれの立場をいかにも表していた。ミカドが住んでいたのは、漆喰壁によって囲まれた庭園の中の、無防備な家だった。その住居は、簡素な生活と、最高の階級と、最高の血統を誇る貴族たち、および文学者や学生、宗教家たちの中心として特別な都市にあった。古典的歴史、神聖な連想、僧院、庭園において、また行儀作法に通じた優美な生活を送る人々の町として、それは特筆される都市だった。ショーグンが住んでいたのは、要塞化され、守備隊の駐屯する城だった。そこから見下ろされる成り上がりの新興都市は、武器庫と封建諸侯と武臣たちでいっぱいだった。人々の感情はこの上なく、ある格言に表れていた。「ショーグンは万民に怖れられ、ミカドは万民に愛される」。家康の後継者たちは、その政策を引き継いだ。邪宗（キリスト教）を根絶し、外国人を帝国から一掃し、海の出入を門に閂を掛けたように閉ざし、波乱の因となる一切を除去するための策を考え実行することを続けた。固守すべき永遠の安定と平和状態、それは家康の苦労の多い人生の苦労が生んだ実りだった。彼らはクロノスが自分の子を貪ることができないよう、熟慮し、努力した。

彼らの計画では、国民の知性はチャイナの古典という万里の長城の内から出てはならなかった。また、アジアの思想において大衆の知性を押しつぶし、押しつぶされたままにする上でこれまで最大の動力源のひとつとしてあった仏教の位階秩序に従う範を示し、後ろ盾となる労を政府は惜しまなかった。外国のあらゆる思想に入国禁令が課された。布告によって外国モデルの船は全て破壊され、大きさも形もジャンク以上のものを造ることは禁じられた。キリスト信仰、海外旅行、外国語の学習、そして外国の風習を持ち込むこと、それらは死によって報われた。将軍の尊貴な行列が通る時、人々は二階の窓を閉め切り、顔を地に着けて拝礼した。おひつ、お鍋にまで、土下座をせねばならなかった。ショーグン体制の起源を暴露する古代史の研究は、庶民には禁じられ、上流は阻害された。厳しい検閲が優れた筆の活力をひからびさせる一方、奨励されたのは欺瞞の混ぜ物・濫造品、また君臨する世襲権力を絶賛すべく、あるいは二重統治体系こそ日本にとって唯一最高と賞揚せんがために、改竄された歴史だった。詩人たち、いや歴史家たちにおいてさえ、尊き簒奪者の表現にオーギミ（漢語で tai-kun、つまり“tycoon”）すなわち偉大な君主あるいは高貴な支配者を意味する、本来ミカドのみにふさわしい呼称をもってする阿諛追従者に欠けることはなかった。徳川の治世における重大な過誤、

残虐行為、圧政は、創作・演劇においては現代から足利時代に話を移され、本当の人名も変えられた。誰もが偉大な簒奪者の無力な臣民となるような束縛が、諜報と抑圧の完璧な体系の内に案出された。政府予算で維持された、信じ難い規模のスパイ軍団である。この障壁の内で、政府自体が巨大な欺瞞となり、公的私的虚言が社会に蔓延し、明らかに好んで嘘をつくまでに、あらゆる偽りが国民の習性となった。ペリー以降十年の間に、神の国にやって来た外国人たちは結論した。政府においても個人の間でも、どこもかしこも根を下ろした嘘、驚くべき熟達と他国にはない独自性をもつ、この嘘こそ日本の国民性として第一に挙げるべきものであると。ショーグンの権威の源泉、真の関係性、それを外国人の目が探り当てることがないようにと生じた虚偽の公用は、万華鏡のごとく多彩で、自然の法則のごとく確立していた。大名の多くは、ミカドに対してではなく、領地と称号をくれたショーグンに対する忠誠を永遠のものと信じていた。歴史を学んだ者からは、大逆の烙印を押される信念だったが。一般の人々はほとんどみな、皇帝は神様のような方だと公式に教えられ、はるか遠い昔からそうだったと思っていて、かつては国民を治める権力者だったことを、知らないか忘れていた。徳川の「偉大な、よき時代」の前には戦乱の時代のことしか知らない彼らは、心から信じていた。絶対不可謬なる江戸の支配者の、父なる慈愛と神授王権を。

日本を統べる軍事力の保持者として、家康が創始したショーグンの家系が最後だったし、最後となるはずだった。彼らの下で日本人は約二百七十年の平和を享受した。強固な支配の下で、二重構造の政府は盤石であり、封建制は永遠に変わらないように見えた。ヨーロッパの封建制を掘り崩した原因のいかなるものも存在せず、また発生する可能性もなかった。教会、帝国、自由都市、工業化・・何一つ無かった。八つの階級それぞれが満ち足りて幸せだった。豊かな土地と温和な気候は惜しみなく日々の糧を恵んだから、チャイナの地方における暴動発生の慢性的原因が、ここでは取り除かれていた。交易も、莫大な富の蓄積も、外国人との交易で豊かになった商人の精神が専制権力にとって危険な限度にまで広がることもなかった。剣と特権はサムライのものだったが、学問と教育も彼らの内に制限されていた。大名たちの貧しさ、また互いに嫉妬し合う不和を維持し、彼らの連合を不可能とする上で、江戸の政府機構はその企図を完璧に果たした。彼ら二人以上の私的会見も、監視のない訪問も決して許されなかった。徳川家臣八万の大軍があり、その支えとなる大諸侯として尾張、紀伊、水戸そして越前といった、将軍家近親の家があった。その収入源と財産を合せれば莫大なものとなる。よって徳川家および幕府、ひいては封建制の打倒など、倫理的に不可能なのは明らかであり、多くの人がそう信じていた。

しかし、その全てが滅び去るのに、ほんの数か月あればよかったとは！幕府はもはや過去の幻影だ。徳川家の人々、かつてペンと剣しか握らなかった君子紳士たちが、ひっそりと、また貧しさの中に生きている。何千人もが、茶を摘み、紙を作り、田の泥に塗れている。かつて領した田で、かつて蔑んだ労働者と同じように。久能、芝、上野、日

光にある先祖の墓は、かつては名誉の地、最も神聖な場として荘厳に飾られたが、いまや気にも留められず荒れ果て、辱められ、衰微している。封建制は大胆な成り上がり者が数回叩いただけで、粉々に崩れ去った。まるで地下墓地の静かな住人が突然日光の下に連れ出されたように。二百五十のプリンスたちは、領地と家来と年貢を手離し、東京での私的生活へと退いた。今はミカドの名の下に行動する、かつての使用人たちに命じられて。静かに余生を送る彼らは、「忘却の岸辺に打ち上げられた、生命の残骸」だ。

ここに挙げた三つの顕著な結果は、いったい何を原因としてもたらされたのだろう。1868 年の洪水が、数世紀の地標を押し流し、国家の古い船を権力の座に浮上させ、新たな乗員と機械を乗せたその船は、近代思想の潮流にまで推し出された。まるでノアの方舟がエンジンと蒸気とプロペラを装備していたように。いったいあの水は、いつ集まり始めたのか？この動きを理解するには、思想の潮流を知らねばならず、そのアイディアを生んだ者たちを知らねばならない。

以前の日本にはたくさんの階級があったが、そのうちの三つにのみ、研究と思索にはげんだ人たちがいた。まず宮廷貴族、つまり京都の学者たち。二番目に僧。膨大な日本の仏教文学作品を生み出した彼らがこのインドの宗教体系に独創的な展開をもたらしたことで、かつて世界で最も広く信者を得た宗教の多様な発展の中に日本仏教は、また別の思想と生活の成果となった。彼ら知識人の活動および宗教団体の成長は、十六世紀がピークとなった。それ以後の日本思想をリードしたのはサムライであり、彼らの内に神道の聖職者を含めてもよいであろう。日本の近代における世俗の知識人による活動が高みを極めたのは、前世紀後半から今世紀最初の四半世紀にかけてである。十七世紀までさかのぼるだけでも、古い歴史を学ぶ者は二元統治の本性に気づき、ショーグン体制は人々を無知のままにしておいてのみ存在し得るということが見え始める。その頃から仏教はサムライの知性に対する掌握力を失い始め、教養ある諸階層が独り立ちしていった。そして孔孟の政治倫理をはじめとするチャイナの学問が再び盛んになった。仏教は社会の道徳的支配力をほとんど奪われるに至った。この原因のひとつにはコリア侵攻があり、明朝が倒れて多くの亡命学者がチャイナから流入したことが活性化をもたらした。北京が陥落しタタールが天下を取った二次的影響は、十三世紀にコンスタンティノープルが落ちた時のギリシア人学者たちの欧州拡散に相当する。ミカドとショーグンの君臣関係は神話的なものになっていたから、日本の君主は誰なのかという我が子の無邪気で真剣な問いにまともに答えられる父親はほとんどいなかった。儒教の五倫なる関係（君臣、親子、夫婦、兄弟、友人）において、主君への服従を第一の徳として学んだサムライたちの中から、長きに渡り隠し通されてきた関係を明確に、復元したいという抑えがたい願望が生じた。この精神を幕府のあらゆる失策が助長した。革命の幕が上がった時、皇帝派を勝利に導いた鬨の声は Daigi meibun 大義名分あるいは「君と臣」、その別をはっきり元に戻さねばならず、つまりショーグンは彼の主君の臣下あるいは僕としてあるべき立場に退かねばならないのだと理解された。

水戸は学者の数と能力と活気において特筆すべき藩だった。チャイナからの学識ある亡命者が大名の賓客として住んでいた。彼らに添削を求めた現地の学者たちが生み出した古典的作品が、ミカドの玉座を押し上げる公論の形成にあたり大変強力にはたらいた。「1868 年に絶頂に達する運動の筋書きを書いた真の作者」、アーネスト・サトウ氏により最初にそう指摘された人物は、1622 年に生まれ、1700 年に死んだ、二代目の水戸侯だ。（※）彼は日本全土から大勢の学者を集め、ダイ・ニホン・シという日本史の編纂に着手した。漢文は日本ではヨーロッパにおけるラテン語のように学ばれるものだが、それによって二百四十三巻、まさにバンクロフト氏の『米国史』にも匹敵する量が書かれている。1715 年に完成して直ぐ、それは一つの古典となった。ただ勤勉に、熱心な学生たちが手書き本を写し続けたが、1851 年にようやく印刷が広範な需要に応えた。この本の傾向は、他の多くの水戸の出版物の大半と共通している。ミカドこそ真にして唯一の権威の源泉として人々の心をそこに向けさせ、ショーグンはただの軍事的簒奪者だという歴史的事実を指摘する。水戸は徳川家の近親であり、他者ならば許されるべくもない見解でも、はるかに自由に表明できた。水戸が始めた仕事の跡に続いた、有名な学者が頼山陽だ。彼の二十年の労作が、平、源、北條、足利など、ミカドが衰微して以降権力を執った武家の歴史をつづった『日本外史』であり、1827 年に完成した。作品は江戸の監査官という試練を通過せねばならず、出版前の検閲でパージされたのは一巻二巻ではない。この偉大な書物には、誤解しようもないほど明白な意図がある。それは、ミカドが唯一人の真の支配者であり、権力の源泉であり、全ての日本人が忠誠を捧げるべき存在であり、徳川家でさえも簒奪者としての汚名を免れないと、暴露することだ。

二世紀にわたる長い平和は、まじめな愛国者たちに考える時間を与えた。長すぎた繁栄と危険の不在により、国民のほとんどが、治める側も治められる側も、そんなことを考える気力をなくていた中、真剣な学徒の燃える眼差しの先で、ミカドは古代の権威を回復した。*この動機のみが革命を、やがてそれが起こるべき時に、ひき起こしたのだ。*彼らは感じていた。国は退化し、武芸は顧みられず、武の精神は眠りについていると。貪欲な外国人の視線が神聖なる国に四方八方から注がれていた。大海はかつては壁となったが、いまや外輪船が往来するための街道になっていた。カリフォルニアおよび太平洋岸に住民が定着し、それが蒸気船の発着する一つの大きな渡し場となって、休むことなき活発なアメリカ人がいまや東方の隣人となった。アメリカの捕鯨船が日本の水域を航行し、現地沿岸住民が見ている前で鯨を捕った。アメリカの船は幾度も彼らの港を訪れたが、それはほんの数名の漂流民を送り届けるためだった。漂流、それは幾世紀途切れることなき黒潮の流れによって太平洋をめぐり、アメリカにもたらしたものである。難破船と積荷を、部族には新たな人を、言語には新たな言葉を、そしておそらくは、ペルーとメキシコにおいてスペイン人掠奪者たちを驚嘆させ、彼らの貪欲を誘った、あの文明を。先例に反逆し、日本人の誇りと孤立を踏みにじって、アメリカ人の指揮官たちはオランダ人のごとくふるまうことを拒否した。彼らは長崎に行くどころか、江戸湾に

姿を現した。長くたなびく石炭の煙は、やがて見慣れた不快な光景となり、滅びの日の前兆となった。ジャンクの船乗りに聞こえた蒸気の汽笛は、古の羊の角笛ほどにも力強く、鎖国の壁をすでに倒していたのだった。松前を通る「夷狄」の「黒い船」は年間八十六隻を数えた。北からはロシアがサハリンを南下し、イギリス人、フランス人、オランダ人、アメリカ人も通商を強く求めていた。夷狄の猛威に抗う備えなど、怠惰な幕府には無いに等しかった。遠くを見通す者の眼には映っていた。外国人の存在を前に、政治のふたつの中心、江戸と京都が避け難く衝突するのは、もう遠くないと。その時が来れば、自然な理によってショーグン体制は倒れるに違いない。サムライはミカドの側につき、封建制の破壊が必然的に後に続くだろう。多くの大名にとっては、カーニヴァルの放蕩に自失する悦楽の宴のときだった、その同じ時間が彼ら以外には、暗い予兆の日々としてあった。

ミカド体制の復活へ向かって流れる思想は、もうひとつあった。純粋神道研究の復興とでも呼ぶべきもので、先の革命の原因を考察する上で、見逃がすことができない。仏教およびチャイナの哲学は古代の信仰に大きな変更、いや「堕落」をもたらした。そう考える学派が現代の文筆家にあり、彼らは現代神道を浄化して本来の姿を示そうと試みてきた。

この宗教によれば、日本に比ぶべき国などない。神々の国であり、神々の代理人がミカドである。よって全ての日本人が彼に絶対的に従うのが当然のこととなる。ショーグンたちの治世が長く続いたが、それは彼らの支持を受けた仏教の世でもあり、純粋な神道がいかなるものだったかなど、実際もう知る者はないといってよかった。その聖書は712 年に編まれた『古事記』である。『日本紀』、『万葉集』などもそれと同じぐらい古く、神道の学者にとっては同様に貴重だ。それらは古代の日本語で書かれていて、この言語の古いかたちを特別に研究した者でなければ読めない。自国の古代文学研究が好まれて進展すると、ほとんど同時に歴史の研究もそうなった。漢学がほぼ普遍的だったから、契沖や荷田といった学者が批判的研究を復興するまで、純粋日本の研究などずっと無視されていた。こうした調査は幕府の不興を蒙ったから、支援はミカドおよび京都の宮廷によってなされた。精神的支持だけでなく、金銭的にもと言われる。馬淵(1697-1769)、本居(1730-1801)、そして平田(1776-1843)へと学統を継いだそれぞれが、純粋神道の偉大な灯火だった。宇宙の始原、古代史、言語、ミカドの真の地位、そして神道という信仰体系に捧げられた彼らの著作によって、京都で、また水戸、越前、薩摩など多くの藩において生き生きと感化がみられたが、すでにそれは幕府の廃止と王政復古を成し遂げようと決意するひとつの政治党派の結成だった。神道研究の必然的結果として、ミカドへの崇敬が増大した。仏教、チャイナの影響、儒学、専制、簒奪および幕府、これらは神道家の眼にはただ一つ、同じものだった。神道、古代の真の宗教、ひとりの愛国者が望み得る全て、良き政府、国粋、黄金時代、そしてキリスト教徒ならば「ミレニアム」の概念によって了解できる最も善き生、これら全てが、ミカドと王政復古の

前では、同じ意味の言葉だった。神道家たちの議論は、伏見に押し寄せた大洪水にまで水の流れが増す上で、あずかって力があったのだ。1868 - 1870 年、戦争とその後の時期において、戦争や「改革」という論題をその論理の厳密な極にまで駆り立てた厳しい党派なるものがあったわけではない。神道学者および歴史家たちの著作の研究、それこそがショーグン体制、幕府、そして封建制をついに打倒したものだった。

外国人たちがやって来るずっと前から、革命の種は播かれていた。水戸の老公、名声かくれもなき先祖にふさわしき末裔として彼は、神道の教えを説き、ショーグンに対し権威をミカドに譲るよう説くことに疲れた末、1840 年、武器を取り戦争という賭けに出た。軍資を得んがため彼は仏教寺院を抑え込み、莫大な銅鐘を鋳潰して大砲に鋳直した。彼の戦争準備を幕府は即座に鎮圧した。彼は十二年にわたり監禁され、ペリー来航が引き起こした興奮の内においてのみ釈放されたのだった。(※)

その間、薩摩、長州ほか南方のクラン（以下、諸侯あるいは藩）が軍備増強を大いに進めていたのは、ありうべき外国軍の侵攻を追い払う準備だけではなかったことを、その後の出来事を証として、今我々は知っている。それはショーグンをあるべき地位に、すなわちミカドのあまたの従臣の一人に格下げするためのものでもあった。これら最も強力な諸侯の祖先は、家康に匹敵する地位と力を誇りながら、ついには武運に見放されたのだった。力づくで征服されたか、圧倒的な力の差を前に無表情に降伏したか。いずれにしろ彼らが徳川家にくっついているのは名ばかりで、力優る者の強圧によってのみ、傲れる者たちから見せかけの服従を搾り取ることができていたのである。本当は自分たちと同じ一封臣でしかない支配者の下にあることは、彼らの永遠のいらだちだった。好機が重なった時、彼らは公然と幕府の命を拒否し、無視した。薩摩および長州の目的、それはもう秘密でもなんでもなかったが、ショーグン体制を破壊し、ミカド以外の権威を認めないことだった。

南方の諸藩が立った。続いて、評議会の声、密謀、クーデター、戦場の武器。それら全ては、水戸がそのために努めた目的のために、はたらいたものだった。それでも彼らは成功しなかっただろう。もし歴史家の筆が生み出した、国民全体の心情という支えがなかったならば。学者たちが心中に願ったことは満たされなかっただろう。刀と筆が、頭脳と手腕が、等しく力を持つ両者が、互いを支えとしなかったならば。

南方の大名の中で、その個性、能力、精力、先見の明において傑出していたのが、薩摩侯である。彼は全大名の中で、加賀に次いで最も富裕だった。彼が生きていたならば、疑いなく 1868 年の革命運動の指導者となっただろう。古代の文学と歴史を学ぶ学生皆を励ます以上に、彼が最も積極的だったのは領内の物質資源の開発と、軍事機構を完全なものとすることだった。討幕の時が満ちたならば、彼はミカドのため彼の政府に完全な成功をもたらすべき軍備を用意したことだろう。計画実行のため、彼はオランダ語および英語の研修を奨励することで、近代兵学と科学的改良について学んだ。外国から学んだ原理による、大砲の鋳造工場と水車を設けた。緊急を要する事の先までも彼は見て

いた。若者を外国に赴かせ、そこで戦争と平和のための理論および実践について修得させるべきだと。だが国を離れることは国禁であり、幕府は逃亡者を捕らえると警告していた。それでも後に巧妙な策によって、才能ある若者たち二十七名が一度に、欧州行きの船に乗り込んだ。江戸の役人の監視にも関わらず、イングランドまた米国へと、続々と後に続いた、この若者たちの中に、現在の日本政府の高官が何人もいるのだ。

侯の名声は帝国全土に及び、国中から集まった多くの若者たちが彼の弟子となった。侯国の首都鹿児島は活発な手工業と知的活動の中心の一つとなった。その旺盛な活力が一向に疲れを知らず、活動が鈍ることがなかったのは、もはや幕府の命数は定まった、その倒壊は確実だ、権威の唯一の源はミカドなのだ、という感情が大きく育っていたからだ。薩摩のサムライとそこで学ぶ者全てにとって、来るべき大転換の時にこそいなければならなかった人が、1858 年、病にかかって死んだ。薩摩侯の死に、彼らの悲しみは言葉になりようもなかった。実権を継いだのは弟の島津三郎だった。侯以外の誰が、これほどの弟子たちを後に残せただろうか。その中で最も頼りにされた、信念の人々こそ、西郷、大久保、そして勝である。現地の人ならば、彼らの名によって戦争の大混乱の記憶が呼び覚まされる。西郷は皇帝の軍を率いた。大久保は幕府の敵としてゆるがず、会議を支配し、玉座の背後にあって事を論理の窮極的結果にまで動かしめた。いまや彼は、佐賀の反乱軍を全滅させ、外交においては北京で平和を勝ち取る名誉に輝き、岩のごとく内閣を率いて立つ、日本の最重要人物である。勝は幕府に長州とは戦うべからずと勧め、彼の主人に地位を退くことを促したが、それが江戸を破滅から救ったのだ。薩摩侯の生徒で、しかるべき地位に信任され、あるいは私心なきキンキナトゥスとなって、祖国のためにはたらいている者たちは、枚挙に暇がない。

ここまで挙げてきた事実に通ずるならば、アメリカ使節の到来以後に起こった一連の出来事は理解できよう。明らかに幕府の勢力は極みに達していた。江戸のショーグン家慶は無為であった。京都のミカド、今の皇帝の父である孝明天皇は、自らの真の地位を理解し、幕府を盗賊の巣、また外国人全てを汚らわしき獣とみなしていた。帝国は全てにおいて革命の機熟するに至っていた。不気味な静寂の中に耳をすます者には、政治的激震の響きが聞こえた。そのニュースは、大気の震えを前兆とするサイクロンのようには予告されなかった。1853 年 7 月 8 日、海も空も自然はまったく穏やかだった。その日「夷狄」の壮麗な艦隊が江戸湾を帆走した。それが台風の外縁だった。サスケハナは後に続く十七ヶ国の艦隊の魁だった。

横浜の断崖に立って見つめる者があった。彼は自問自答した。あのような船を造り、礼譲と情誼、忍耐と堅固の精神を知る者を、力あれど未だ用いず、日本人と平等に扱われ、また扱うことを求めている者を、夷狄だと言えるだろうか。もし言えるのであれば、彼ら以上に日本人もまた夷狄だろうと。その男こそ勝、現在の海軍長官である。

その夷狄の使節は、奇妙な生き物だった。彼は江戸湾を去って長崎に行くように言わ

れた。彼は無作法に断り、とどまり、測量し、威厳を示した。まったく異例だった。他の夷狄はこれまでそんなことをしなかった。静かに命令に従ってきたのだ。その上、彼は親書と贈答品を持って来ていたが、それは全て「日本の皇帝」宛てのものだった。ショーグンは皇帝ではないが、そう信じさせねばならない。単なるミカドの将軍などと呼ばせてはならない。この称号は国内では十分に畏敬された。だが異邦人は敬意を払うだろうか？江戸の漢学カレッジ（ダイ・ガク・コー）から一人の衒学先生が派遣され、蛮人ペリーの相手をすることになった。漢学の論理でさばき、用語の正確性にこだわり、彼は主人の位を高める義務を果たさねばならなかった。彼が条約文に挿入した、あるいは少なくとも使用を認めた称号大君、これは全くの漢語だが、公文書において全日本の最高統治者を意味する。ミカドからショーグンに授けられた称号ではなく、皇帝の公文書で使われたこともない。幕府と衒学先生すなわち林としては、京都の真の君主に嘘をつくつもりはなかった。正面が白で、背面が黒の蛙のようなもので、見える方向が正面となるのだ。京都から見れば、偽りは白、それは「無意味なもの」。怪しまず、ひっかけられた夷狄の方から見れば黒、かのペリーの条約の前文に曰く、それは「日本の尊き君主」。だが妬ましき思いの天皇と宮廷にとっては、この罪なき白い嘘も、他の場合同様、嘘の中の真っ黒の嘘だった。それが引き起こしたのは最大級の不安と警戒だった。ショーグンには大言壮語をもって権威を騙る権利など、影さえもなかったのだ。

それはイソップ物語第 26 話の新たな実例だった。江戸の大蛙が、京都の牡牛と同じ大きさにまで膨れ上がろうとした末に破裂した。1868 年、外交において最早死骸となった両生類は、東京の南西 95 マイルの都市静岡に埋葬された。その徳川家の古き故郷を筆者が 1872 年に訪れた時、ある建物の中でペリー提督が持参したたくさんの贈り物を見た。まさに最後の「タイクーン」がそこから 1 マイルも離れていないところにいて、彼の何千の旧臣たちがすぐ近くにいるという場所で、それらの多くは黴が生え、錆びつき、打ち捨てられていた。全てのラベルに「合衆国の誰某より日本の皇帝に贈られた」とあった。ミカドは目にしていない品々だ。嘲りに長じた日本人とはいえ、これほどひどい当てこすりがなされていたとは。ミカドの政府はピラトのアイロニーをもって、それら贈り物の保有をタイクーンに許したのである。そのラベルと共に！

もしペリーが真の事情を理解していたならば、艦隊を大坂にやって京都のミカドと交渉しただろう、江戸にいるその代行者とではなく。そう十分推論できる。それをなした外交官はいるし、おそらく彼は下僚を相手にしているなどとは思ってもいなかったのだ。

1859 年に外国との交易のため港を開いてすぐの結果は、生活必需物資の価格混乱と、ほぼ決まってそれが伴う苦難、国外からもたらされた疾病感染と死であり、さらに破滅的地震、台風、洪水、火事、嵐の異常な連続が加わった。災禍うち続く中、ショーグン家定が死んだ。

相続人をひとり選ばねばならない。選択を任されたのはタイロー、すなわち摂政の井伊だった。大変有能で、大胆不敵、政敵の言葉を借りるならば彼は、悪事を平然となせ

る非道の男なのだった。ほとんど最高権力といえるものが彼の手にはあった。社会的地位はそこまで高くないにもかかわらず。水戸の大名の七番目の息子、ケイキ（以下、慶喜）。一橋家に養子に入っていた彼が、多くから望まれた選択肢だったが、井伊は無視して紀伊侯を選んだ。十二歳の少年である。憤激する水戸、越前、尾張の諸侯による抗議に対し、彼は監禁をもって応えたので、徳川家近親の支持はもはやのぞめなかった。北條のごとく、ミカドを廃位し、少年を擁立する。彼はそこまで考えぬき決意していたと、政敵たちは言う。同時に、彼および幕府に反対する者すべて、また京都で、江戸で、あるいは他のどこであれ、ミカドによる王政復古を煽り立てる者すべてが彼の手により、禄を奪われ、あるいは投獄され、追放され、また斬首された。犠牲者の中には多くの高名な学者、愛国者たちがあり、彼らの宿命的な死を憐れむ思いが至る所で生じた。

ミカドは最高統治権者であり、ショーグンはその従臣のひとりにすぎない、ならば、外国との条約はミカドのサイン無しに成立しない。

ショーグンと彼の閣僚たちには、いかなる条約にサインする権利もなかった。これはディレンマだった。外国人は幕府に条約の批准を迫ったが、ミカドと宮廷は同意を猛然と拒否した。井伊はためらうような人間ではなかった。現地の年代記編者は書く。「彼は思い至った。次から次に別の国の人間がやって来る。彼らは京都の人々が意を変えるのを待たねばならない。不幸な偶然事が災いを、すでにチャイナが経験したことを、日本にもたらすかもしれない、と。そして、彼は神奈川条約を締結し、自分の判を加えた。その後京都に、やり取りを報告した」。

ミカドの同意なく条約にサインしたことは、京都および国中に激しい憤激をひきおこし、やがて響き渡る叫びとなった。「尊きミカドを讃えよ。夷狄を追い払え」。愛国者の目に摂政は、反逆者と映った。彼の行動は、幕府の敵たちに悪意の合法的口実を与えると共に、摂政の破滅を兆していた。全国の幾千の愛国者たちが故郷を去った。ミカドが権力を回復して蛮族を一掃する、その日までは帰らないと言い置いて。沸騰する愛国心からこぼれ出た暗殺者の集団、その大半は国をさすらうローニン（以下、浪人）。外国人を斃し、摂政を斃し、ミカドのために斃れる、喜んでそうする者たちだ。３月２３日、井伊が暗殺された。（※）江戸城桜田門の外で、今その近くには軍事・外務の省庁舎や、帝国の工学カレッジのゴシック煉瓦建築が立っている。続いて虐殺されたのは、無礼な外国人たち。そのような非難を受けるいわれのない者も含まれる。そして公使館の放火。これら事件の主要な狙いはほぼ全て、外国との紛争に幕府を陥れ、その倒壊を早めることだった。外国人には放火犯や暗殺者としか見られない素人連中も、現地人の眼には高貴な愛国者として映る。中にはいまやミカドの政府の高官になっている者たちもいる。

幕府の威信は日を追って衰えた。影響力と権力の潮は、真の首都へ向かって流れ続けた。ショーグンが京都を訪れてミカドを表敬する慣わしが、二百三十年の中断を経て復活した。これで普通の人々にもはっきりと、真の関係性が理解できた。彼らはこの時初めて知ったのだ。あまりに長く無礼にも無視された、統治原理が存在することを。越前

侯が首相となったのは、幕府が京都宮廷の命令に従って行ったことで、前例がなく特別だった。彼自身の行動、そう多くの人が信じているが、おそらく南方大名たちの手先をよろこんで務めただけと見て間違いないと思えることは、大名たちに江戸居住を強制する仕来りの廃止だ。籠の扉が開かれ、野生の鳥が飛び去るごとく、彼らは一週間もたたないうちに、家来一同を伴って、その町から流失した。江戸の栄華は夢覚めるがごとく消えかかり、徳川家の権力と偉大さは無に帰した。もう幕府の指図に従う諸侯はほとんどなく、段々と人心も離れた。「そうして」現地の年代記の言「徳川家の威信は、三百年の歳月に耐え、頼朝時代の鎌倉が月夜の星明りに思えるほどに輝き、大名たちに息つかせぬほど江戸の勤めを交替で果たさせ、八万の臣下を昼夜もなく指一本で動かしたものだったが、それが一朝にして、瓦解したのである」。

いまや諸侯は真のミヤコ、京都に集まり、町は平家の世以来絶えてなかった陽気な喧騒の中にあった。幕府への忠誠はおしまい、彼らは自分自身、でなければ宮廷の命に従って行動するようになった。彼らは皇帝の金庫を満たし、忠実な奉仕によって天子の支配力を強化した。外国人を憎悪しながらも、商いの売り上げによって空っぽの財庫を満たしたいという欲求が、彼らの多くの心を揺さぶった。風に葦がなびくがごとく。領内の港を開いて、幕府が独占してきた国際通商の利をせしめたいと願う者もいた。時論刊行の戦争が始まった。諸侯は幕府に忠誠を果たす義務があるのだと示そうとする者たちがいれば、そんな考えは反逆だと宣告し、歴史的事実を楯にとって、ミカドひとりが君主なのだと証明する者たちがいた。京都における公論の圧力下にあった幕府は、威信の回復を願い、港を閉鎖して外国人に日本を去るよう説得することに傾注した。その目的でヨーロッパに使節団を送った。段階を進めるため、浪人たちはいまや暗殺を組織的に行い始めた。計画に反対する者すべてが、河原に首を晒す対象となった。「簒奪者」徳川からの思いつきによって、彼らは足利初期三代のショーグンたちの木造の首を切り落とし、ポールに突き刺して晒した。浪人たちは逮捕された。長州は彼らを支持し、この都市を治める会津は彼らを投獄した。ミカドは、勇ましく騒ぎ立てる者たちや公家たちに強く迫られて、彼らがその姿を見たこともなく、その力など夢にも思わない「毛唐」の追放令を発した。最初に動いたのは長州で、下関に砲台を並べた。外国人に対して責任がある幕府から武装解除を指令されたが、彼らは拒否し、1863 年 7 月、外国船に発砲した。彼らはミカドに従い、ショーグンに従わなかったのだ。翌月、鹿児島がイギリスの小艦隊によって砲撃された。

9 月 4 日、長州の砲撃手たちが幕府の蒸気船に発砲した。この船には長州の敵である小倉藩士たちが乗っていた。小倉は外国船に便宜を供し、彼らへの砲撃を拒否していた。（※）京都の長州藩士たちはミカドに嘆願した。大和へ進軍し、自ら蛮族に対する戦場にのぞむ意志を帝国の民に示すことを。提案は受け入れられ、準備が整えられ、そして突然、すべてが中止され、長州は最悪の嫌疑対象となり、皇居を護る二重の諸門が固められ、都市は激しい動揺へと投げ込まれた。その間、皇居の審議は三条実美（現・ダイ・

ジョー・ダイ・ジン)、沢（1870－71 外相）と他五名の宮廷貴族の官位官職を奪って追放すると決した。他に十八名が罰せられ、毛利家の者とその家臣すべてが断固として、「首都に入ることを禁じられた」。つまり彼らは、アウトローとされたのだ。軍が集められ、都市は防衛体制に置かれた。

こうなった理由は告発にあった。長州藩士たちがミカドの身柄を我が物として、帝国の政策を発令させようと謀ったというのだ。十八名の公家と六名の首謀者たちが、陰謀加担の容疑者となった。それが幕府の使者を乗せた蒸気船に発砲したことと合わせ、幕府およびそれに忠実な諸藩の憤激を招いたのであり、その最たる藩が会津だった。長州人たちは七人の公家と共に、1863 年 9 月 30 日、彼らの藩に向かい逃げ落ちた。

いまや長州は日本全土からの逃亡者、浪人たちが目指す集結地となった。翌 1864 年 7 月、諸藩への務めをもたない何百人もが、ひとつの「非正規軍」(※)を名乗って南部から京都へ到達し、毛利および七人の貴族の名誉回復と、夷狄の駆逐を嘆願した。この男たちを直ちに攻撃する戦備が、会津およびショーグンの封臣たちにはできていた。ミカドは嘆願者の意見を容れず、回答を与えなかった。静かにその数を増していた「非正規軍」はいまや怒りを募らせ、郊外に布陣した。彼ら長州人たちの元に、藩士二百名を連れた家老が、暴力を抑えよとの毛利侯の命を承けて派遣されてきた。自制して待った彼らを罰すべしと宮廷が通達した 8 月 19 日、会津の影響の下、慶喜が懲罰軍の指揮にあたった。自らの動機の正しさを訴え、宮廷の友人たちに遺憾の念を切々とつづる文面と涙のうちに、長州藩士と浪人たちは会津への復讐を誓った。皇居の花の庭に部隊を駐屯させた会津は、ミカドの玉座近くを騒がせることに許しを請い、戦争の賭けに応じ、一気の攻勢に打って出た。「危機の到来だった」現地の年代記は語る。「殺気が天地に満ちて溢れた。チョーテキ、何世紀も廃れていた、その言葉が今まさによみがえった。幾万の住宅が破壊され、幾百万の人々が灼熱の渕に突き落とされた」。1864 年 8 月 20 日、夜明けとともに戦が始まった。千三百の長州人たちが三方面から目指すのは皇居。その九つの門を攻め立て、花の庭を包囲せんと。徳川と会津の部隊には、越前、彦根、桑名などの諸隊が味方に付いた。二日にわたる熾烈な戦闘により都市は大火にみまわれ、強風にあおられた火によって、広範な街区が灰と化した。戦士たちの装備の多くは刀、矢、大砲、小銃。街路 811、家 27,400 戸、宮殿 18、屋敷は大 44 小 630、神社 60、寺 115、橋 40、乞食小屋 400 と「エタ」の村落ひとつが火にのまれた。耐火倉庫 1216 が戦闘後も続いた砲撃で破壊されたのは、長州人に隠れ家を与えないためだった。「九重の花に囲まれた都も一朝にして、戦火の煙の中に消えた」。家を失った市民が郊外に流れ、露天の住まいで暑熱と群がる蚊に苦しむ中、具足をまとう者たちが恥も恐れもなく盗人を演じた。「花の都は、不毛の焦土となった」。長州は完敗を喫し、その都市から追われた。彼らの内に、拘禁され首をはねられた三十七名もいた。

翌月、幕府は毛利の本家分家すべてから称号を剥奪するよう朝廷に求めた。成功に気をよくして、懲罰軍を周防長門二州へ進めよと、全諸侯に命を降した。揺れる諸侯にひ

とつの実例を示し、いまだ権力はその手にあると証明してみせる、徳川はこの時そう意図していた。同月、すなわち 1864 年 9 月の 5 日と 6 日、下関は四ヶ国の旗を掲げた連合艦隊により砲撃された。多大な生命財産の破壊の後、寛大なる勝利者たちは三百万メキシコ・ドルの「賠償」を要求した。京都で幕府に抗い、下関で「文明世界」の武力に敢然と挑み、圧倒的数の弾丸と兵士に追い立てられるまで砲撃を受けつつ立ち続けた、その勇敢な藩の前に今、ショーグン体制の連合軍が迫っていた。

それは、南部が長きにわたり続けてきた戦争準備の結果が、明かるみに出るときだった。長州藩士は団結し、油断なく、敏捷に動ける服装で、英米のライフルで武装し、ヨーロッパ式用兵術で訓練され、大砲を潤沢に供与されていた。彼らの銃砲撃は素早く、しかも正確だった。彼らは甲冑と刀槍を捨てていた。長州はずっと蘭学がさかんな土地で、オランダの軍事書がたくさん翻訳され、使用された。よく訓練された部隊は、サムライだけでなく、一般徴募された人たちからなり、彼らは十分な給料をもらい、熱気に満ちていた。幕府方は、雑多な寄せ集めで士気も低く、行軍が命令されるやいなや病気になるような、戦闘意欲に欠けた軍隊だった。最有力の諸侯が参戦を辞退し、あるいはきっぱりと拒否した。ショーグンの相談役だった勝をはじめ、賢明な指導者たちのほぼ全てが、この遠征を非難した。

1866 年夏の三ヶ月間の戦役は、幕府軍の屈辱的完敗に終わり、長州に凱歌が上がった。まだ戦場に臨まぬ諸侯も、前線に出ることを拒否した。ショーグン体制の権威失墜はもはや、取り返しがつかなかった。

若きショーグンが、絶え間なき心配に疲弊して大坂で亡くなったのは、1866 年 9 月 19 日だった。彼はミカドから条約に同意を得ていたが、その見直しと、兵庫は決して外国との通商に開港しないことが条件だった。かつてのライバル、慶喜が宮廷の任命により徳川家を後継したのが 1866 年 10 月。ショーグンとされたのは 1867 年 1 月 6 日。（※）彼はその地位を何度も辞退していた。その位にふさわしい個人的美徳が彼には数多くあったが、ただ危機にあって一枚の羽をその手から離さない確かさだけが欠けていた。平均的に日本人には、チャイナにみられる愚鈍さと頑迷さがない。その主要な特徴は移り気なことだと思われる。移り気を人格化したのが慶喜だ、と彼のかつての親友たちは言う。顧問たちの助言を得て、彼がどちらに進むか決めたとする。だが、最も鋭敏な観察者でさえ決して予測できない、変更がある。新たな助言者が現れた時、それは起こりやすい。このような男を、この危機に当って、その地位に任ずればどうなるか、明らかに、ただ真っ逆様だ。宮廷における彼の人気は、おそらく兵庫・大坂の外国人への開放に彼が反対したことによると見て間違いない。

1867 年 10 月、土佐侯が公然と、新ショーグンに辞任を迫った。その時、多くの有能なサムライたち、すなわち西郷、大久保、後藤、木戸、広沢、小松、また彼らの後ろ盾である島津三郎および越前、宇和島、肥前、土佐の前藩主たちが、西暦紀元 1200 年に先立つ「前ショーグン時代」の基礎の上に政府を組織することを、強く求めたのだ。彼

らの連合は強力であり、1867 年 11 月 9 日、揺れ動く慶喜は公論に屈し、セイ・イ・タイ・ショーグンの辞任を申し出た。

古代王権への大きな一歩だった。だが日本においては、ミカドの身柄を確保する党派なり指導者が、状況を支配するのであり、徳川家に最も忠実な会津藩が皇居諸門の警護を続ける中、実権の行方は依然不確かだった。徳川か、大名たちの評議会か、あるいは正当に朝廷に帰するのか。薩摩や長州の、影響力を持つサムライたち、また土佐、越前、宇和島の諸侯は、問題を宙ぶらりんにしておくつもりなどなかった。彼ら連合の兵士たちが、小さな集団をなして徐々に、首都に集まって来た。西郷、そして大久保、木戸、後藤、さらに岩倉、彼らはまさに本気であり、絶好の機会を逃がすはずもなかった。彼らは宮廷をかき回し始めた。ミカド孝明が亡くなった、その決定的な瞬間を自ら有利な状況にするため、そして大胆なクーデターによって、ショーグンの職務および幕府を廃止し、若き皇帝を頭首として、古代的基礎の上に立つ政府を再建するために。

1868 年 1 月 3 日、突如として連合（薩摩、土佐、越前、安芸、尾張）の諸部隊が皇居の諸門を支配下におさめた。それまで少年皇帝を取り巻いていた宮廷貴族たちが解任され、連合の意に賛同する者だけが参内を認められた。こうして粛清を経た宮廷が、ミカドの名のもと発した勅令において、国政はいまや一元的に朝廷の手中にのみあるとうたわれた。幕府とショーグン職は廃された。地方政府が三等級をもって組織され、その役職に充てられたのは新たな統治者に忠実な者だけだった。毛利家は復権を果たし、追放された七人の貴族も召喚された。最高行政官は王族の有栖川宮、その補佐に任じられたのは、三條と岩倉だった。

徳川の家臣たちは、怒りのとどまるところを知らなかった。揺れ動くショーグンは、今度は辞任を後悔して権力の座に戻りたいと望んだ。彼は自分に忠実な諸侯と共に京都を去った。公には従う者たちの激情を静めるためだと説明されたが、実際には大坂を抑えて南部勢力の連絡を阻止するためだった。それからほどもなく、1 月 19 日、江戸で、薩摩藩のヤシキが幕府軍に急襲され、炎上した。尾張越前の両侯が宮廷から派遣され、慶喜を招聘した。新政府に参加し、以前のもの以上に高い官職への任命を受けるようにと。慶喜は彼らにそうすると約束したが、彼らが去るや否や、会津の好戦的忠言に押され、説き伏せられた。力ずくで再び京都に入り、「若き皇帝の側から悪しき顧問団」を追い払い、「剣にて裁きをつけん」と。彼は軍を引き連れて都市に近づくことを宮廷から禁じられた。首都へ通ずる二つの街道に沿って障壁が設けられ、その陰に南方諸藩士総計二千が大砲と共に張り付いた。1 月 27 日の夕刻、慶喜は大坂を発った(※)。軍勢は会津桑名の両藩を先陣に、その数一万、いや三万ともいわれる。彼の使者は伏見で障壁の通過を拒否された。官軍（王の軍隊、京都勢）の砲が火を吹き、戦が始まった。ショーグンに従う者たちを政治のチェス盤において動かした最後の一手、それにより彼らは朝敵となった。彼らへの信望は流れ去った。

戦闘は三日間続いた。圧倒的兵力を前に、南のサムライたちが見せたのは、恐れを知

らぬ勇気だけではない。先立つ年月における軍事訓練の成果が示された。戦闘は強者の下に帰するのではない。それは知恵、活力、冷静、勇気をもつ側に帰する。ショーグンの軍隊は打ち負かされ、手に負えない騒乱が大坂に押し寄せ、歴史ある城は王の軍隊によって燃やされた。首領は見とがめられることなく一隻のアメリカ船に難を逃れ、彼自身の船によって江戸へ帰り着き、城に籠って隠棲したいと求めた。彼の直臣たち、従属大名（フダイ）の大半、会津、仙台ほか北部・東部の大名たちは、再び戦って威信を回復するべきだと彼に迫った。閣僚の一人は、徳川の名誉を守るためにはそれが欠かせないとして、主人のハラキリを熱心に希った。その勧告は容れられず、提案した本人ひとり自らの腹を開いた。莫大な兵力、武器、軍需物資、さらにミカド側をはるかに上回る艦船。成功のチャンスは十分にあった。だが、この時、その封臣は王に忠実だった。その揺れ動く者は、もはや揺れなかった。戦を説く者に耳を貸さず、朝敵になど絶対になりたくない彼は、二名の最高官の助言を聞き届けた。勝と大久保一翁である。そして彼の主人であるミカドに対し武器を取ることはなく、私的生活に引退すると宣言した。兵を率いることを拒否し、それにより国は長い内戦を免れることができたゆえに、この人物をワシントンになずらえているのを耳にしたこともあるが、あまり適切な比較とは思えない。個人として、慶喜は高い水準で完成された紳士だった。ただ、野心と弱さがあった。政治的には、彼はただ為すべきことを為した。勇気というものの良質な部分を慎重に選んだ。彼の中に、何か高遠な特質、天稟の証といったものを見出すのは難しい。彼の政治における最後の、最良の決断は、勝と大久保に負うものだった。勝、薩摩の古株の弟子にして西郷の同志、彼はずっと前から統治権がミカドのものとして当然回復されるべきであり、そうならざるをえないと予見していたが、悪評も、暗殺をも恐れず、主君に辞任を勧めたのだ。勝利せる南軍が西郷に率いられ、江戸を攻撃せんと南郊で待機していた。日本の都市を落とすに要するものは松明一本、もし抵抗していれば、自制無き勝者により江戸にはほとんど灰しか残らなかっただろう。勝は西郷に会い、ショーグンの静かな従順を保証し、都市に危害を加えないでくれと求めた。そうなった。慶喜の熱狂する家臣たちが上野の境内にたてこもった。7 月 4 日、彼らは攻撃を受けて敗走し、都市の誇りだった壮麗な寺院は灰となった。戦争の舞台は会津の山地、若松へ、さらにエゾの松前および函館へと移った。どの地においても、勝利はミカドの錦の旗の上にもたらされた。1869 年 7 月 1 日、その日までに全ての反乱に終止符が打たれ、帝国は普く平和を享受した。

　およそ革命というものが生み出す集団が様々ある。彼ら種々雑多な者たちが、ミカドのもとに王党派を構成していた。高潔な愛国者と並んで、いかがわしい浮浪の徒、あらゆる種のヤクザ者、下級の二本差し、すなわち浪人、「外国人嫌悪」「鎖港派」すなわちジョーイ（以下、攘夷）、そして神官、学生たちがいた。ひとつの責任政府の確立という大胆な願望を真剣に抱く者など何名もいなかったが、日本が西洋文明を採用して国際社会に仲間入りすることを熱望する者など、それよりさらに少なかった。彼らは意見の

あらゆる潮の流れ、小さな渦を利用して自分の見解を前面に押し出し、それぞれの目的を果たしてきた者たちだったが、全員共通の目的として、ミカドを高めることがあった。多数派を結び付けていたのは、外国人を追放するか、あるいは憎むべき治外法権条項—それは今なお日本の愛国者皆に刺さった棘だ—を抹消するために条約を改定するという、ひとつの決然たる意志だった。十八ヶ月間、攘夷派すなわち「外国人嫌い」の活力が反逆する徳川家臣団との戦役に利用された。戦争の終わりが、新政府の試練となった。下級の二本差したちは、外国人を日本から追放し港を閉ざすという約束の履行を求めた。神職者たちは政府に自国の「キリスト教徒」を迫害せよと説き、仏教の廃絶、および勅令による神道の地位の確立、汚れなき神政を基礎とする政府の回復を要求し、「蛮族追放」の叫びに唱和した。高官たちでさえ、外国人追放をあきらめていない者が多かった。ただ、そうするつもりではあっても、現状では不可能であることを、彼らのうち最も賢明な者は知っていた。だから彼らは単純に望んだ。時期を待つ、その間に強くなる。だが威丈高な勇者たち数千の忍耐を維持するのは簡単ではなかった。何しろ彼らが口に糊する唯一の道具は刀だ。最初に注意を払われたのは、軍をひとつの国民的軍隊に再編すること、そして帝国の軍事的資源の開発だった。その全ては、外敵を打ち払い、商港を閉ざし、専制的孤立の日々に帰る見通しをはらんだ目的により行われた。外国文明を熱望する者たちは、むしろ徳川の側だった方にこそ存在した。彼らは欧米を体験していた、多くの開明的紳士たち、また学生、旅行者たちであり、外国人の発明を自国のために利用したいと望んでいた。それなのに、かつて外国人の追放、鎖港、条約否認を望んでいた攘夷派、すなわち「外国人嫌い」たち、異国の者など獣と数等しか変わらないとみなしていた者たちの多くがいまや、ミカドの政府の一員であり、進歩的考えの代表者であり、親欧州主義あるいは西洋文明の守護者・実行者なのだ。

夢見た理想の精神を逆転させる変化は、何がもたらしたものだろう？かつて自らがその破壊者であった信仰を、いま彼らが説教しているのは何によるのだろう？「鹿児島と下関で受けた授業だよ」と言う者がいる。また「彼らが見込んでいる、通商の利益だろうね」と言う者もいれば、「革命の子は養育で変わったのさ。いま権力の座にある政府は、間違ってか故意によってか、揺籠に入れられたんだよ」そう言う者もいる。

砲弾、通商、現実の外国人との接触、それらは疑いなく、彼らの目から鱗が落ちるのを手助けしただろう。だが、あくまでも、手助けにすぎない。それらは全てチャイナにおいて失敗した手段だ。半世紀にわたって試みられながら。日本でも失敗したことだろう。日本人を諸国民の礼譲ある社会に参加せしめたものは、*内側からの衝動*なのだ。日本人は自分が間違っているとか劣っているとか認めた時、よりよい者に自ら進んで変わろうとする。それは彼らの最も優れた資質だ。それこそが彼らをして、かつて破壊者として対した信仰を説かせ、かつて説いた信仰を破壊させているのだ。

ミカド支持者を啓蒙するという大仕事に着手したのは、大久保、木戸、後藤といった日本人指導者たちであり、彼ら全員が、古い自国の文学と外国の理念、その両方を学ぶ

者たちだった。仕事を完成させたのは、日本人の著作家たちだ。公家、すなわち宮廷貴族たちは、外国人の存在を無視したい、国外に追い払ってしまいたい、外務省、ではなく当時はまだ下級官庁だったが、その下級官職の任命権によって彼らを悩ませたい、などと望んでいた。大久保、後藤および木戸は、この計画に即座に反対し、朝廷の貴族のひとり東久世を、宇和島侯だった伊達とともに兵庫に派遣し、条約に対しミカドの同意を与え、外国公使たちを皇帝が謁見するとして京都に招いた。英蘭の両公使は招待を受けたが、他は辞退した。英国使節の行列を、狂熱的暗殺者が襲撃したが、空しく終わった。英国竜騎兵の銃弾、槍、サーベルに耐えた男が首を失ったのは、後藤の剣の一閃による。ミカドの謁見を保証すると決まっている外国人の傍らに、彼は馬を進めていた。異邦人を初めて見た公家たちの転回は、速やかで完全だった。彼らがかつて畜生と思っていた連中を、彼らは友人としたのだ。

ミカドへの建白書において大久保が更に表明した考えは、宮廷と揺れる大名たちを震撼させた。「中世以来、我らが皇帝は御簾の陰に暮らし、大地を踏むこともありませんでした。御簾の外で何が起ころうとも、聖なる耳に届きませんでした。皇帝の住まいは深い隠棲の内にあり、当然、外界とはまるで異なりました。ほんの限られた宮廷貴族のみが玉座に近づくことを許されたのは、ほぼ天理に反する慣例でした。上位者に敬意を払うのは人として道義の最初にあるものであり、尊敬する上位者が高位にあり過ぎるからそれを怠るとなれば、そのとき君臣関係は破れ、臣下の需めるものは君主に伝わりようもなくなります。この堕ちた習わしが全ての時代において普通でした。だが今や勿体ぶった礼儀作法は無用となり、簡素簡潔が我らの第一の目的となりました。京都は交通において奥まった場所にあり、政府の所在地として適しません。陛下には当座大坂にご動座いただき、首都を彼の地へ移し、よって過去が我らに残した数多の悪しき習いの一つを正そうではありませんか」。

建白書は宮廷において直ちに鮮やかな効果を表した。若きミカド、睦仁は自ら国政評議の場に臨み、宮廷貴族と大名たちの前で、ひとりの現実の統治者として、誓いを立てた。「熟議を行う議会を設ける。全ての措置は公論によって決定される。旧来の非文明的慣習を打破する。自然のはたらきに示されている正義と公平を行動の基礎とする。英知と学問を広い世界に求め、もって帝国の基礎を確立する」。この誓約が新たな政府の根本原理となった。

これら約束はまた、傀儡が発した大言壮語だった。高潔で分別のある君主が、国をより高い営みへ導く大志を抱いて発した、意味深長な言葉だった。あの崇高なる瞬間、東洋の専制政治の首長たる者の口から、このような言葉がこぼれたということに、我々は好意的感嘆を引き起こされる。「ひとつの国民は、ひと時に生まれるだろうか」ヘブライの予言において発せられた問いに、それは崇高な反響をもって応え、肯定する。その響きは、新たな、そして高等な国民の発展、それがアジアの一国にも可能だと、人間性における最も強い信条において信ずる者たちのみ成し得る発展の、歓ばしき先触れのよ

うだ。実際のところ、それは十六歳の少年の口から発せられたのであり、その言葉の持つ途方もない重さを、彼自身は夢にも思わなかったが、皇帝としての彼が事実においてもそうなったのは、気高き成り上がりたちの仕業であり、彼らが自分たちの考えを新政府の基礎とする決心をもって、その言葉を少年の口にのせたのだった。建白書および大久保と彼の同僚たちの奔走の結果、政府は最終的に江戸に移転した。ミカドが京都を去って別の町を住まいとする。その時、帝国中で生じた非常に深い感情。外国人がこれを理解するのは易しくない。千年にわたって京都はダイ・ニッポンの首都だった。二千五百年にわたって、と一般に信じられていたが、国を治めたミカドたちの拠点はどれも、その聖なる都市のある場所に近かった。狂信的一団のヤマト・ダマシーに燃える激しい反対もむなしく、彼は東へと発った。江戸が新たな首都であるという事実に国民がなじむよう、その名はトーキョー（以下、東京）、すなわち東の首都と変えられた。

近代文明の道へ進もうとする衝動は、そこからさらに高まった。大久保、木戸、後藤、岩倉、三條、板垣、大木ら昇り行く官僚たちが、政治体制を粛正強化しようとしていた頃、人々を、そして突然権力者にのし上がった連中を、啓蒙するべく作品を著した日本人たちがあったが、己が思想を語ることを己の死と引き換えにせずともよかったのは、彼らが最初だった。出版の自由は広く保証され、首都では新聞が発生した。その最も活発な一つが、主要指導者のひとりとして活躍する木戸自身が設立した*シンブン・ザッシ*であり、今も健在だ。新政府はキリスト教諸国に等しい寛大さをもってふるまったが、その最たるものは、徳川家家臣のうち博識また科学に通じた者を招き、彼らが政府のもと名誉あるポストを占めたことだ。政治指導者でも、血だまりの穴に落とされた者はなく、ミカドの慈悲深き恩恵によって許され、帝国全ての人々の和解が賢明に企図されていたのだった。伏見、若松、函館で王の軍隊と戦った者たちの多くが、いまや王政復古とその論理的帰結の擁護者なのだ。あの榎本ですら使節となって、東京の宮廷からサンクトペテルブルクの宮廷へ遣わされている。敗れた大名たち全てが再び、地位と収入を手にした。その結果として、帝国の完全で幸福な再結合がある。学者の中には、筆と演説のより大きな自由が認められるまで、官職を辞退した者もある。

過ぎし日々、幕府の支配下にあって、悪評を厭わず、死をも懼れず、英蘭の言語を学び、西洋の泉によって知力を養った者たちがいた。書物は手で写さねばならず、印刷はまれだった。後に、外国の技術・科学に習熟した人間と通訳者の必要に迫られた幕府は、生徒を選抜して海外に留学させた。内戦が勃発して彼らは呼び戻され、日本に着いたのは開戦まもない時期だった。彼らは、その内のひとりの言によれば、「キリスト教諸国の近代文明に入れあげた熱で、顔を紅潮させて」帰って来た。そうして彼らは翻訳と著作の準備に取り掛かった。それを新しい権力者たちは、争うように読んだ。次々に版を重ね、買われ、読まれ、借りられて、流通した。それらの著作は西洋諸国の歴史を誠実に語り、その流儀・慣習・信仰を説明し、支持した。その資源、思考と教育の方法、道徳、法律、政治体制などについて述べ、明快に説いた。著作家たちの中でも特に傑出し

ていたのが、学校教育者の福澤だ。西洋の考えに、その原文にふさわしい日本語の着物を彼は着せた。その上で、自国民の弱点、欠点、誤りを指摘し、外国人がもたらした知識全てを見下す偽りのプライドと孤立によって、いかに日本が欧米のように進歩することを妨げられてきたかを示し、外国人が現在の彼らになる元となった思想を祖国もまた消化吸収しない限り、征服あるいは衰亡が避け難いことを説き明かした。いま日本で高みにある、もしくは向かっている人物で、福澤の著作を読んで大いに刺激を受け、またそこから恩恵を受け続けていることを認めない者はほとんどいないだろう。「外国人を追放せよ」そう叫んで復古へ向かう運動に参加した指導者たちの多くが、彼の著作を読み切った後には、「その進歩とやらにいつの間にか引き込まれてしまっていた。別にそれを望みもせず、誘われたわけでもないのに」。自分たちがどうしてそんな運動をしていたのか、もう全く説明できなくなってしまったのだ。政府の官職、権力へと甘言をもって福澤を誘う多くの申し出があったが、彼はその全てを辞退し、自分の学校と教育・翻訳の仕事に今も献身し続けている。彼は人生を、その高貴な骨折りに費やしている。西洋の思想・生活の解釈者として彼は、文明の単なる外面的装飾・輝きにはほとんど無関心だ。「西洋の流儀と慣習」について彼が書いた本、彼の小冊子・小論諸巻、それらの発行部数は大変なものだ。

中村、彼もまた学校教師であり、自分の小論を著すとともに、ジョン・スチュアート・ミルの「自由について」、スマイルズの「自助」の他、道徳・宗教についての小冊も含め、相当な量の英文学を翻訳し、広い読者を得ている。キリスト教の問題、宗教の自由についての彼の請願が、皇帝とその周囲に与えた印象は深甚であり、ウルトラ神道家たちの動きを止める強力な一手となった。森、箕作、加藤、内田、瓜生、彼らもまた著作家・翻訳家として高尚な仕事をしてきた。帝国の進歩的人物に混じって、四年近く日本で生活した筆者は信じて揺らぐことがない。日本語で出版された本を読み、学ぶ、それこそが、日本人の心の変化、近代文明を志向する衝動の発達において、他のいかなる理由・因果にもまして大きくはたらいたものであることを。

この十年の間は、純粋に日本文学といえるものの生産活動は、ほぼすっかり止まっていた。最近の出来事の歴史、蛮族追放を訴える時事小論・いくさ詩などが多少出ていたのが内戦の前。戦後の文学活動は、翻訳、政治文書、己が信念に殉じた「尊王家」たちの伝記、そして大半を占めるのが、西洋の思想を日本人に分かりやすく表現したもの、これらでほぼ全てという様相を呈したのだった。

戦争は 1869 年 7 月に終わった。(※) 報酬が分配された。政府は官職を明確に定め、ほぼ六世紀にわたって有名無実だった称号に内実と権限を与えることにより、尚一層しっかりと固められた。けれども、国家という船はまだ、大量の無用な枯れ枝を積み、年月に疲れた状態で、機械は危険なほど摩擦が大きく、乗員は口論し、良き船ならば必ず「下ろす」べき、そうでなければ助からないと真の愛国者たちがみなす危険な貨物を大量に載せていた。荷下ろしは通例の方法で達成された。何百という役人を一度に解任し、

後の任用にはミカドの希求する政策に賛同する者のみを充てたのだ。

その上更に、それが存在する限り国家の発展と平和には保障がないということが、日に日に確かになったのが、封建制度だった。それが育てた諸藩の精神、家中意識は国家の統一にとって致命的だった。日本人が「私の国」と言う時、それが単に彼自身の藩を意味する限り、そこに忠誠心はあっても、愛国心はない。行動の機は熟したようだった。封建制廃止を主張する印刷物が活発に刷られていた。いくつもの大大名が、かなり前からすでに心構えはできていたわけだが、いまや公然と変化を擁護した。彼らより小さい大名たちはそれに反対するほど、無分別ではなかった。四人の大大名、すなわち薩摩、長州、土佐、肥前が、運動の先駆者だった。彼らが玉座に差し出した請願書にあったのは、大名の封土は私的財産などではなく、ミカドのものとみなされるべきだという主張だった。彼らは自藩の登記簿を君主の元に戻すと申し出た。こうしたことが表に現れた徴候として、時が来たのだと告げていた。その背後に、封建制を一掃すると決意した人物が、少なくとも三人いた。木戸、大久保、岩倉だ。まず初めに、宮廷貴族(クゲ)、領主貴族(ダイミョー)の呼称が廃され、両者ともに華族、すなわち貴族、が名称となった。旧藩主たちは、当座のチジ（自藩の長官）に任命された。それが道程を行き易いものとした。1871 年 9 月(※)、勅令によって大名たちは東京に召喚され、私的生活への引退を命じられた。彼ら皆が静かに命令に従ったことには、一つの例外もなかっただろう。東京で玉座の陰にいた者たちには、彼らの（すなわちミカドの）命令が抵抗にあったならば、彼らはそうなると見込んでいたが、その時は血を流すという覚悟があったし、期待さえもあった。この措置に敵意を覚える者も抵抗できなかったのは、この勅令の形を作った者たちの性格を、彼らが知り過ぎていたからだ。筆者の人生における最も印象的な経験のひとつとなった光景がある。福井にある城の大広間、そこで越前の大名が彼の二本差しの家来たち三千人に別れを告げた。そして町の人たちの涙と笑顔と最後の親愛の挨拶の中、彼のものだった土地、彼のものだった歳入、彼に従順だった部下たちを後に残して彼は去り、ひとりの紳士、一私人としての東京での生活に引退した。

日本の封建制度は八世紀近く前に始まり、1871 年の半ばまで存在した。だが、その最後の時代においては、それは力の表象としてそびえ立つ塔ではなかった。倒壊するずっと前から、それは空ろな殻であり、巨大なペテンだった。封建制が元気に生きていられるのは、指導者が知力と行動力の人である時だけだ。全大名の内、個人として重要人物と言える人は十指にも満たなかった。偉大なのは絹の羽織を纏った姿、あるいは食欲だけで、彼らはただ愛想のいい、何者でもない人たちだった。好色な者や、酒に溺れる者、そして肩書きだけの愚者が多かった。各藩における真の権力は、より低い地位にある有能な者たちの手中にあって、彼らが自分の主君を支配していた。*この彼らこそが、現在の日本政府を構成している人物たちなのだ。*彼らはショーグンに対し立ち上がり、打倒し、私的生活に追いやり、今度は自分たちの主君である大名たちに対して、同じことを強いた。彼らは皇帝を掌握し、その名によって政府を動かしている。それでもミカ

ドは、彼の無為な祖先たちに比べればはるかに、統治者ではある。だが統治の源泉の方は、同じままということだ。実際に数え上げると、1872 年における政府高官の五分の四が、長州、薩摩、肥前、土佐、四藩の出身者だ。1876 年の同種の統計によれば、北部・中部の出身者の割合がふえている。とはいえ、これは党派主義ではない。最も有能な者たちが、どこの出身かをとわれず権力ある地位に昇っている。天性の才能こそがものをいい、いまや閣僚にも各省庁にも多くの旧幕臣の姿があり、その中には勝、大久保一翁、榎本や、徳川家の子弟さえいる。政権は交替したのではなく、移行したのだ。そして新しい機構を動かし、新しい仕事をしてみせている。

1868 年以降の日本で、現実の指導者は誰か？あるいは誰だったか？それは大久保、木戸、岩倉、三條、後藤、勝、副島、大隈、大木、伊藤、他にも多くの者がいるが、その中に公家は二、三人、大名は一人もいない。ほぼ全員がただのサムライ、領主貴族の家来たちだ。

1868 年の革命の目的は達成された。ショーグン体制と封建制度は永遠に去った。いまやミカドは復古王政のもと、敬愛される皇帝としてある。その青年は現在二十四歳、すでに独り立ちした、しっかりした人格を見せているが、将来は国民を真に治める者として、ツァーリに劣らぬ存在となるだろう。神道を国家的信仰として確立しようという企図は、不名誉な大失敗に終わった。古い神社が粛正され、新しいのがたくさん建てられたわけだが。この古代的礼拝も政府の保護と影響力の下で、外見上は立派なものだ。仏教は今なお日本人の国民的宗教だが、疑いなく翳りが見える。

この章を要約しよう。ショーグンはただ、ミカドの多くの封臣たち、どちらかといえば高くない地位にある、その一人に過ぎなかった。歴史的には、簒奪者だった。タイクーンという名辞は外交上の欺瞞であり、正式には、その称号のもつ権利をショーグンはその影さえ持っていなかった。異国の外交官が条約を結んだ相手は、そうする権利をひとつも持たない者だった。幕府とは、組織化された簒奪だった。「霊的」皇帝、「世俗」の皇帝という決まり文句は、外国人の出版者による文字の上の虚構だった。ミカドの権力の衰退の上に、封建制は興隆した。それは国民統合の主要な障害であり、あの衝撃以前から倒れかかっていた。日本史の全てを通して、ミカドその人および玉座に対する尊敬の念は、国民的特質として最も強固なものであり、政治的効力として最も強大なものだった。幕府は故意にミカドの神聖さを誇張した。日本人は感受性が強く、外国の物でも助けでも、それが彼らの力を増すためになりそうなら、いつでも何でも利用する気でいる。とはいえ、国民の性質、誇り、感情、宗教、そして世界の全ての国との対等性、別に格上でなくともよい・・それらを保持しようとする強力な傾向が存在する。過去八年に日本で起ったことの真の説明は、これらの傾向と、日本国内の歴史にこそ求められる。ショーグン、幕府、おそらくは封建制もだが、たとえ外国人の上陸がなかったとしても皆倒れただろう。近代文明に向かう運動の起源も国内にあり、単なる外国の衝撃や

圧力の結果なのではない。この運動の成功を確かなものとできたのは、啓蒙・教育という仕事によってのみであり、それは現地の人々、すなわち学生、政治家、および素朴な愛国者たちによって着手され、継続されたのだ。

1868 年革命後の新政府を待っていたのは、大変な苦労を要する仕事だった。年月に病み衰えた国を癒し、封建制と党派主義を、その悪弊と共に根絶し、日本に新たなナショナリティを与え、その社会システムを変え、新しい血を注入し、急に強い光を見て目をくらませている隠者の国を、富と力を誇り攻勢にあるキリスト教諸国の競争相手にするというのだ。それは国家の再生か、破滅か、の問題だった。まるで生まれ変わって、二度目の歴史を始めたようだった。

これほどの仕事に必要とされる能力とは、どれほど超絶的なものか！国民の統一、会議の調和、利己的ではない愛国心がどれだけ求められるのだろうか！同輩の中から抜きん出て、頼朝、太閤、そして家康も含め、誰もなし遂げる力をもたなかった仕事をやり遂げるほどの強力な知性と比類なき働きをしてみせられる指導者とは？国内には鈍重で保守的な農民、その背後に無知、迷信、寺社の企み、政治的敵意がある。彼らの国土は外国人の攻勢に直面している。日本に関して全てを金と商売の見世物を通じて学んだ連中だ。その外交官もまたシャイロックの原理をもって方式とすることがあまりに多い。国外にはアジア諸国が、彼らの一員からツラン的思想・原則・文明からの離脱者が出たことを、蔑みと嫉みと警戒の目で眺めている。腹立ちを隠しきれないチャイナ、あからさまに反抗的なコリア、彼らは「外国の鬼」に卑屈に服従したとして日本を嘲っている。

初めて、世界に対し尊厳と全権をともに備えた使節団が、その国を代表した。一行は、取るに足りない役人や地方貴族ではなかった。その出向は、爪先に接吻するためでも、傀儡やサクラを演じるためでも、日本から出て行ってくれと異人に頼むためでも、外国人の眼から鱗を落とさぬようにするためでも、軍艦を買うためでも、人を雇うためでもなかった。ひとりの最高位の貴族、はるか遠い昔にさかのぼる血統をもつ者が、皇帝陛下および国民政府の代理人として、四名の閣僚を伴い、ダイ・ニッポンと条約を結んだ十五ヶ国の宮廷を訪れるために発ったのだ。彼らこそ岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文、山口尚芳である。彼らには、政府のあらゆる省庁を代表して、外国文明の資源と方法論について学び報告するために送られた委員たちが随行していた。彼らがワシントンに到着したのが、1872 年 2 月 29 日。そして史上初めて、ミカドの署名した書簡がアジアの外で目に触れることとなった。それは 3 月 4 日、古代ヤマトの衣装に身を包んだ使節たちによって米国大統領に贈られ、アリノリ・モリ氏が通訳を務めた。「自由の共和国の最初の大統領」と、エタを市民に引き上げた男たちが、友愛の調和の下に向かい合った。百二十三代目の君主が、帝国の第二十六世紀において挨拶を贈った市民、彼が治める国ではまだ、百年に一度咲くアロエの花は開いていない。3 月 6 日、彼らはコングレス（連邦下院）議場で歓迎された。この日、日本は世界史の舞台に、正式にその第一歩を印したのだ。

◇訳注
史実のディテイル、諸事件の内情についての誤りは措きます。以下、主に単純な誤記載についてふれます。
※水戸光圀の生没年は 1628 年および 1701 年です。
※水戸老公斉昭責罰の件や朝陽丸事件のストーリーは、特に実際とは違います。
※将軍家茂の逝去 8 月 29 日、慶喜の宗家相続 9 月 28 日、将軍就任 1 月 10 日です。
※徳川慶喜は京都に軍を発した時、自ら出陣はしていません。
※原文に戊辰戦争の終戦が 1870 年 9 月という記載がありましたが、明らかな誤記なので訂正してあります。
※井伊暗殺は正確には 3 月 24 日、廃藩は 8 月 29 日の発令です。
文中イタリックの部分は、原文でそうなっているところです。グリフィスがこの小論で、最も強調している部分です。

◇原文の用語
原文で日本語が借用されている場合、基本的に初出時のみ片仮名書きにしました。
例　Dai Nippon　→　ダイ・ニッポン
ミカドとショーグンは全て片仮名書きにしました。

ミカド　the mikado
ショーグン　the shogun
ショーグン体制　shogunate
将軍　general
慶喜　=全て Keiki
タイクーン　tycoon
大名　daimio
夷狄、蛮族　barbarians
諸侯、藩　clan
アリノリ・モリ氏　Mr. Arinori Mori（彼以外、著者は姓名の順を逆にしていません）
※非正規軍　the irregulars（奇兵隊を指すと判断します）

◇安政期については長い原注があります。以下、訳出します。
※井伊首相は美濃（誤→近江）琵琶湖畔の城郭都市彦根の大名だった。歳入は三十五万石（訳注：この石高は名目生産高）。彼はフダイの筆頭にあった。個人としての名はナオスケ。朝廷における称号のカモン・ノ・カミは、宮中における簾、幕、敷物、畳、および清掃をしかるべく管理する宮内省管下部局の長官のことだ。京都における階級は「チュージョー」すなわち「将軍第二級」。バクフにおいては首相、すなわちタイロー。

息子が一人いて、後にニューヨークのブルックリンで教育を受けた。

※1860～1868 年における江戸と京都の策謀の応酬を、限られた紙幅で物語るのは無理だろう。親しい批評家が指摘しているように（*The Hyogo News*, 1875 年 6 月 9 日）、ショーグン体制の転覆を望んでいた水戸侯は、王政復古の成就を、彼の息子のケイキが大いなる名誉と栄光の地位にあるかたちで、見たいと明らかに、願っていたのだと思う。追放された彼に、京都から送られた秘密指令にはこうあった。「幕府が宮廷の意見を待つことなく条約を締結したこと、またショーグンにこれほど近い親族を辱めたことは、公論軽視も甚だしい。獰猛な夷狄が我が国の門口にある時、目に余る失政にミカドの心は穏やかではない。ゆえに、汝助言をもって幕府を輔け、夷狄を追い払い、民の意を満たし、陛下の御心を安んじ奉るべし」と（『近世史略』p.11、サトウ英訳）。この書簡は後に幕府に引き渡され、それから間もなく（1861 年 9 月：誤→1860 年）老公は亡くなった。水戸藩は後年二つの党派、「正党」「邪党」に分裂した。水戸侯が家定に毒を盛ったという話に証拠はなく、サー・ラザフォード・オルコックのそうした推論にも根拠はないが、この著者が日本史に関して語った大半についての値打ちが下がるわけではない。

※（大獄の犠牲のひとり）吉田松陰は長州のサムライで、洋学を学んだ。彼こそ下田でペリーの船に乗り込もうとした男だ（ペリーの“遠征記”p.485-488）。1854 年以降、彼は藩内で監禁されていた。ある論文において、幕府に対して武器を取る計画に反対したのが江戸の支配者の意にかない、自由となった。井伊の専横があって後、吉田はもはやショーグン体制救うべからず、倒れるべしと宣言した。ショーグンの閣僚が京都で愛国者たちを捕縛していく中、吉田は命をなげうつ決心をした。企みは探知され、彼は江戸に檻送され、斬首された。死後あらゆる党派から崇拝されている、この熱烈な愛国者は、日本の行く末を最初に見通した者のひとりだった。外国文明を取り入れなければ、インドのごとく、外国の進歩の前に滅びる外ないのだと。今、国家の事業として行われていることは、彼が生前に残した優れた論説において、強く求めていたことである。

　もうひとりの犠牲者に、欧文を学び、蘭学漢学の立派な学者となった、橋本左内という人が福井にいる。日本陸軍の外科医を務める私の友人、Dr. 橋本の兄でもある。忠誠心と愛国心に殉じた、この紳士によってこそ、福井において西洋科学への熱意が奮い起こされたのであり、ついには筆者が福井における任を受けることにもなったのだ。橋本は、外国人との開かれた平和的な関係が必要と見ると同時に、それは維新によって統一された政府の下でなければ無事には成し得ないと信じていた。権威が分裂した体制のままでは、日本は破滅すると彼は考えていた。ペリーがもしミカドを相手にしていたら、対外戦争が起こった可能性もあるが、おそらくそうはならなかっただろう。江戸の偽皇帝を相手にしたことで、内戦、外国の敵意、国の貧窮、何年もの長きにわたる民の不幸が、さけられなかったのだ。